

【論文】

言語の境界を生きる

「母語」「母国語」「外国語」をめぐる言語意識から

鄭京姫*

概要

本稿は、「母語」「母国語」「外国語」をめぐる中国朝鮮族日本語学習者の言語意識をライフヒストリーインタビューから聞き、考察を行ったものである。そこには、3つの言語に対する葛藤やアイデンティティの揺れが語られていた。しかし、その揺れを乗り越え、そのどれも「完璧」とは言えない互いの言語を補い合いながら生きる姿も見られた。さらに、「言語の境界」を生きること、「自分」にとって意味のある言語で生きることの重要性が語られ、ことばをアイデンティティの観点から捉え直すことの必要性が示唆された。

キーワード

中国朝鮮族日本語学習者, 言語意識, 境界, ライフヒストリー, アイデンティティ

1. はじめに

「すべての人にとって『母語』と『母国語』が必ずしも一致しているとは限らないのではないか？」本研究の出発はこの疑問からである。筆者にとって母語は韓国語である。もちろん、国籍も韓国なので、母国語は何ですかと聞かれると迷わず韓国語だと答えるだろう。それは筆者にとって当然のことであり、疑ったこともなかった。しかし、日本語学習者の「日本語人生」¹というライフヒストリーを聞いている中で、中国朝鮮族日本語学習者に出会うことをきっかけに、「母語」「母国語」「外国語」という「言語の境界」について考えるに至った。

彼らの母語である「朝鮮語」は、「韓国語」とは

少々語彙や意味が異なることもあり、朝鮮語を用いて韓国人とコミュニケーションを行う際に、その意味が通じない時もある。また、国籍は中国であっても、「中国語」もそれほど上手ではない。中国人のような中国語を目指した時もある。そのため、「自分は何者なのか」、「中国人なのか、韓国人なのか」「朝鮮族なのか、韓国人なのか」という狭間で苦しんだ経験もある。しかし、そのどれも「完璧」とは言えないそれぞれの言語を補い合いながら生きる姿も見られた。「日本語」がただの「外国語」ではなく、一番自分らしくいられたと感じさせる言語にもなる。

筆者が彼らに出会い感じたことは、「日本語」を学ぶ「日本語学習者」は、「母語」の次に「外国語」を学んでいるのではなく、すでに、多様な言語を持っている学習者もいて、そうした学習者は自分にとって意味のある多くの「言語」によって「生きている」ことを忘れてはならないことであった。

本稿では、彼らの語る「母語」「母国語」「外国語」という括りを「言語の境界」とであると定義し、

* 早稲田大学大学院日本語教育研究センター (hime_0404_4@yahoo.co.jp)

1 筆者の研究は「中国朝鮮族」を対象するものではなく、学習者が日本語を学び始めた「あの時」から「今・ここ」に至るまでを物語にし、そこから日本語教育の在り方を考える「日本語人生」というライフヒストリーである。

その3つの言語をめぐる言語意識から「言語の境界」を乗り越えることから、「生きる」ことの意味について述べることを目的とする。

2. 研究の視点と方法

まず、本研究の視点は、「中国朝鮮族」という括りではなく、「個人」の言語生活、言語意識であることを断っておきたい。インタビューの一人である秋さん（仮名）も、研究協力者としてすでに3回ほどインタビューに応じた経験があると語っていたように、中国朝鮮族に関する研究は盛んであると言えよう。例えば、中国朝鮮族のエスニシティに関する研究（カン, 1992; 韓, 1993）や中国朝鮮族のアイデンティティを2言語（朝鮮語と漢語）に対する言語意識を通して考察したもの（藤井, 1993）を挙げることができる。だが、その多くは彼らのアイデンティティの葛藤に焦点が当てられ、中国朝鮮族の実態などを描き出したものであると言えよう。本研究のインタビュー3人とも共通して挙げたことでもあるが、「中国と韓国がサッカー試合をする場合どちらを応援するのか」、「あなたは中国人なのか韓国人なのか」という質問は必ず受けていたと語る。藤井（1993）の論文にも「あなたは自分を何人だと思えますか？」という質問に対して「朝鮮人／中国人」が提示されている（p. 297）等、個人の中にある複雑、かつ複合的なアイデンティティが朝鮮族日本語学習者にはきちんと反映されておらず、アイデンティティと民族が混同されていると思われる。むしろ、中国朝鮮族日本語学習者が、多かれ少なかれアイデンティティの揺れや葛藤を感じているのは確かなことであろう。しかし、はたして彼らを「朝鮮民族」としてのエスニックアイデンティティと、「中国国民」としてのナショナルアイデンティティを持つ存在と見なすことしかできないのだろうか。筆者は、エスニックアイデンティティやナショナルアイデンティティといった集合的なアイデンティティよりもむしろ、「個人に注目し、その人の人生を含めて聞くこと」（中野, 桜井, 1995）が必要であると考えた。故に、本研究における言語意識とは、言語をどのように捉えているかという「個人の考え」であるとする。

本稿におけるインタビューは以下の表1のように3名である。インタビューは、「理論的サ

ンプリング」²（木下, 2003）に基づき、2時間から3時間程度のインタビューを一人につき1回から3回行った。

インタビューの形としては、ライフヒストリー法におけるナラティブインタビューを用いた。ナラティブは、「インタビュー者の経験世界に迫り、語り手の主体性を重んじ、語り手が自由な語りの生成過程を促す方法」（やまだ, 2007, p. 130）であるとされる。つまり、調査者の関心に沿って語られるのではなく、インタビューによって語られていくことから本インタビュー法を採用するに至った。なお、インタビューは、インタビュー者が住んでいる町、仕事場から近いところ、もしくは、インタビューの希望する場所で行うことにした。

インタビューの際の使用言語は主に朝鮮語（韓国語）で行ったが、日本語が混じた場合もある。分析には、ICレコーダーで録音したインタビューを書き起こし記述³したもの、及び筆者のフィールドノーツを使用する。分析方法は、本研究では、「ストーリー自体を調査の対象として扱う特徴があり、単に、言語によって示された内容を見るのではなく、語りをなるべく切り刻まずに、語りの流れや全体的な形を大事にしながら、ナラティブの時間的な進行という文脈で捉えられている」（フリック, 1995/2002, pp. 252-255）というナラティブ分析を用いた。本稿でも語りの中から「意味があるとされる出来事」を提示しつつ論を進めていくことにする。なお、語りからの引用は〈 〉で表記する。

2 データ分析と並立しながら分析に基づき、さらに必要と思われる協力者にインタビューを依頼する形式（木下, 2003）。

3 記述にあたり、桜井, 小林（2005, pp. 135-138）と、ザトラウスキー（1993, pp. 59-60）を参照し、トランスクリプトのルールを設けた。「…は沈黙でドット1つは1秒を指す。—は長音、?は上昇のイントネーションを示す。また、[]は補足説明であり、(())はインタビュー場面の状況や、語り手の表情や聞き手が気づいたことの説明である。{ }は非言語的な行動、例えば{笑}。↑は質問を意味している。」

表1 インタビューイ^{*1}

仮名	年齢	性別	出身	職業	来日	インタビュー日
コウさん	29	男	延辺 ^{*2}	大学院生	2006年	2009.12.18 / 2010.1.26
秋さん	28	女	黒竜江省	大学院生	2004年	2009.12.3 / 2010.5.28 / 2010.7.30
愛さん	27	女	黒竜江省	大学院生	2010年	2010.11.30

*1 インタビューイには仮名のもと論文の公表の許可を得ている。年齢、職業はすべてインタビュー時のものである。

*2 吉林省に位置する朝鮮族の自治州としての正式名称は、「延辺朝鮮族自治州」である。本稿では、「延辺」と略す。

3. 本研究における「母語」「母国語」「外国語」とは

本研究における「母語」「母国語」「外国語」という枠は、インタビューで語られたものである。筆者自身は、「母国語」という概念には否定的であり、「母語」に対立する言語を「外国語」という枠で規定されることに疑問を持つ。また、日本語教育において、母語と母国語に関する思想的な批判や論考（イ、1996；田中、1981）に大いに賛同する立場であるが、「母語教育」に関しては必要だと考えている。なかんずく、「継承語教育」における母語教育がそうであろう。しかし本稿は、そのような言語のカテゴリーを批判的に問うことではなく、その「言語の境界を生きる」ことの意味に視点をおいたものである。従って、「言語の境界」の意味を考えるためには重要な用語であると思われるため、あえてこの分類のままにした。

なお、本稿では「韓国語と朝鮮語」、「中国語と漢語」、「中国人と漢族」といった用語がインタビューの語りに混在していたが、そのまま用いる。それは、筆者自身も同じ概念であると捉えているためでもある。また、標準朝鮮語とは少々異なり、主に中国の延辺地区で使われている言葉があり、これをインタビューの一人であるコウさんは、「ヨンピョンマル」と言っていたのでそのまま使用する。

4. 「母語」「母国語」「外国語」をめぐる言語意識

4. 1. コウさんの場合——そのどれも「私のものではない」

中国吉林省の延辺地区で生まれたコウさんは、朝鮮族小学校の時に漢族学校に転校した。その理由は、漢語能力に対する不安があったからだ。コ

ウさんのご両親を始め、親戚の多くは、韓国式のカラオケや飲食店を経営している。また、衛星放送などで韓国のドラマを見て過ごしたからか、韓国語は自然に身についた。だから、問題は感じていなかった。しかし、やはり漢語が心配だった。転校した小学校では漢族にあまりなじめなく、友達も少なく、朝鮮族学校に戻りたいと何度もそう思った。だが、しっかり漢語ができるようになりたかったため、中学、高校まで漢族の学校に通うことにした。そのおかげで、漢語はほかの朝鮮族の友達よりできる。〈漢族みたい〉と言われることもある。大学に入ってから漢族と寮で生活したため、漢語はそれなりに上手になった。しかし漢語での講義は、なぜか大変だと感じる自分がいた。今も漢語は心配である。

韓国語は重要。僕が、いくら漢語能力が足りなくても、それで嫌なことがあっても帰られる家みたいな場所というかな。中国語は必要。特に中国で生きていく上で、漢語能力がないといけない。日本語は役に立つ…というかな。日本語や英語は就職において役に立つだけかな。この言語が自分にとってなくてもそれは別に苦にならないでしょう？言葉が3つあってもどれも中途半端じゃ、かなり損している気がする。日本語はできないのが当たり前だから別に気にしないかな。

コウさんはいつでも帰ることができる〈家のような言語〉である韓国語を母語とみなしている。中学から高校まで学んだ日本語は、英語と同様でその言語がなくても別に苦にはならない言語、つまり外国語にすぎない。中国語は中国で生きていくうえで必要な言語であること、だからこそ漢語能力に対する不安を抱いていると思われるが、なぜかその不安は消え去ることがない。すべての言

語が中途半端であり、どれも中途半端では、かなり損している気がする」と語るコウさんにとって、それでも、韓国語には愛着と自信があった。しかし、その「家」のような彼の母語は日本に来て、日本で出会った韓国人との付き合いから少しずつ変化していく。自分の韓国語が韓国人に通じなかったとき、中国で味わったことのない「俺は誰だ」という意識をすることになる。

韓国人は연변(ヨンピョン〔延辺])を貧しいと思っているし、同じ民族だと考える人はいない…。韓国人に朝鮮族という言葉すら、田舎くさいとか一…。貧しい感じがしているみたいです。訛りがあるからすぐわかるみたくな。自分が漢族だったらいいのに一と思ったこともありますよ。

韓(1995)では、韓国人との葛藤において朝鮮族の「中国人」としてのアイデンティティが強くなるという傾向を指摘しているが、コウさんもそのような葛藤や揺れを感じるようになる。インタビューの途中、突然、コウさんに「トンム」⁴という言葉はどう思うのかと聞かれた。思わぬ質問に〈トンム↑〉と聞き返すと、〈ヨボトンムって変ですか↑どんな感じですか↑〉と感想を求められた。コウさんのお祖父さんは、お祖母さんのことを〈トンム〉か、〈ヨボトンム〔女房同志〕〉と呼んでいる。それを韓国人に話したことがあって、北朝鮮⁵の人が使う言葉みたいとからかわれた。その時に、自分が生まれ育った〈ヨンピョン〉の言葉がバカにされたようで、もう二度と言わないと思った。〈ヨンピョンマル〉は、北朝鮮のある地域のなまりと少々似ているということを筆者も今回初めてわかった。韓国と北朝鮮の親族用語に関して調査をした王(1990)によると、「トンム」という言葉は夫婦の間での呼び方として使われていて、延辺地区でも以前は「トンム」を北と同じよ

うに使用したようだが、現在はほとんど使われていない。筆者はコウさんのお祖父さんがお祖母さんのことをそのように呼んでいることが、「トンム」という言葉の響きと共に可愛く感じられたこと、また、その「トンム」という言葉は、昔、韓国でも「友達」という意味で使われていたこと。友達という言葉が現在の韓国では「チング」と言っていて、韓国ではなくなった言葉が、延辺で、そして、コウさんの家族によって生きられていることがとても素晴らしいことであると感想を兼ねて話した時、コウさんはとても嬉しそうな顔をしていたことを覚えている。そして、しばらく考えた後に自分の思いを語り続けた。

朝鮮語も韓国語も漢語も日本語も…僕にはそのどれも私のものではない一、あの、私のものではない言葉に嫌気がさしたこともあるから…。自分がどっちかの国の人だったらいいのに一と思ったこともあります【笑】。

コウさんにとって日本語は外国語として、それほど重要な言語ではない。ただ、役にたつ言語として認識されている。母語である朝鮮語は、韓国語と少々語彙や意味が異なることも確かにあるが、意味が通じないだけでなくバカにされたと感じた経験をする。また、国籍は中国であっても、中国語を中国人のように話せないという不安がある。おそらくコウさんは、このような体験において自分は何者なのか、という葛藤と揺れの中で3つの言語、そのどれも〈私のものではない〉と感じていたのではないかと思われる。

4. 2. 愛さんの場合——言語は〈道具〉と〈毒〉

黒竜江省出身の愛さんは、中学1年から高校3年生まで日本語を習った。学校での外国語の授業は決まって「日本語」であった。大学に入ってから、経済学を専攻したため、英語を主に勉強し、日本語は4年間全く手をつけなかった。それでも、2003年、日本語能力試験においては300点ぐらいで1級を取った。愛さんは、大学を卒業してから、韓国に留学することを決めた。韓国でも指折のA大学の大学院の修士課程を修了し、博士課程で、江戸時代の作品を中心に、韓中日越の伝奇小説について比較研究をしている。現在は日本の大学院に交換留学中であるが、その主な目的は博士論文の資料収集のためである。愛さんとは1回しかインタビューができなかった。それは韓国に

4 「トンム」に関する社会言語学的考察を行った孫(2004)によると、「韓国では「トンム」という呼称を、北朝鮮の社会主義理念の象徴として忌避し、一般の会話などではほとんど使われなくなった(2004, p. 83)」が、その現象が、韓国の「国語研究院掲示板」(1999年10月30日付)において明らかになっていることを指摘している。

5 正式名称は「朝鮮民主主義人民共和国」だが、便宜上「北朝鮮」と略す。なお、韓国も同様に「大韓民国」ではなく「韓国」と略し、記する。

帰る2か月前ということもあったが、〈韓国人としてインタビューに応じることはいいけど、朝鮮族としてのインタビューはしたくない〉と話していた。つまり、アイデンティティのようなことは語りたくないということであった。実は、愛さんとのインタビューが実現したのは、秋さんの紹介があったからだ。筆者が秋さんとインタビューを行った際に、他の中国朝鮮族日本語学習者ともインタビューがしたいと話したら、秋さんは〈私の友達は他の中国朝鮮族とは違うと思います〉と愛さんを紹介してくれた。「中国朝鮮族日本語学習者」という括りが、愛さんにとっては失礼なことであったことをインタビューが始まって間もなくわかることになる。

私は韓国人です。よく韓国人ばいと言われ
るけど、私は韓国人です。だから母語も韓
国語だし、他の朝鮮族とは違います。

確かに、愛さんは「朝鮮語」という言葉をあまり使っていなかった。自分の母語は「韓国語」であり、自分は「韓国人」として認識している。その理由は、お祖父さんが中国に移り住んだため、彼女は〈移民〉のような感覚を持っているためである。国籍はもちろん中国であるが、自分自身が中国人である、という感覚はない。愛さんもサッカーの例を挙げたが、どこの国であろうが韓国を応援するのが当然であり、もし、中国と韓国が対戦することになって韓国を応援すると述べる。そして、〈朝鮮族ですか、中国人ですか〉という質問を多く受けてきたが、彼女は、その質問自体が非常に失礼だと感じていると語る。

日本には四角い車が多くありませんか？…
私はその車を見るだけでも嫌になって…
韓国がいい。日本では韓国人ですか、中国
人ですかと聞かれる。日本人は朝鮮族と
いう人たちをもちろんよく知らないと思う
し、そのなんかなぜナニジンなの？と聞
くのか—失礼だと思います。

日本の生活のすべてにおいて、イライラを覚えているとも語る愛さんは1年間の日本の生活において楽しい思い出というはなく、少しでも早く韓国に帰りたいと思っている。Skutnabb-Kangas (1981) は、どの言語が本人の言語か定義するに

あたって4つの基準⁶を挙げているが、愛さんの場合は、「自分が母語だと見なしている」という意味で韓国語が母語である。それにもかかわらず、自分が「韓国人」であることに周りから疑問を持たれている点に強い憤りを覚え、中国人、または朝鮮族というふうにはアイデンティファイされている今の状況がとても苦しいと感じていると言えよう。その中で、3つの言語を愛さんはどのように捉えているのだろうか。

韓国語は楽で、無意識に頭で何かを思い出すときには必ず韓国語です。中国語は母国語か、第1外国語になるかもしれないけど、これから中国で生きていく上で必要な言語ですね。日本語は外国語だから…それほど重要じゃないです。現在も研究のため必要な言語にすぎないです。

「なぜ江戸時代の文学を研究しているのか」と思わず質問をした。それは、漢字ができるからという指導教授のアドバイスがあったからであって、江戸時代の文学にも、また江戸時代自体にもそれほど興味はないと語るのである。文献を読み、ゼミで日本語を使う以外、彼女にとって日本語は単なる外国語、研究のための言葉である。もしかして、日本語が単なる外国語で研究のための言葉にすぎないと思うのは、日本に来て聞かれたこと、「韓国人ですか、中国人ですか」という周りの影響があったからかもしれない。中国での朝鮮族は少数民族として周知されているため、それほどアイデンティティというものに悩まされたこともなく、差別を受けたこともない。もちろん、漢族と常に競争を強いられているため、それはある意味少々しんどいけど、それほど苦ではない。しかし、来日してから周りの人に朝鮮族と言われることにストレスを感じていたのであろう。

愛さんは3つの言語をどのように考えているのか。答えは、〈道具〉と〈毒〉に例えられた。生まれて朝鮮語、中国語、学校では中国人より有利な日本語を決まって勉強する朝鮮族は自然に3か国

6 origin (最初に習得した言語), competence (もっとも理解している言語), function (もっとも頻繁に使う言語), identification (自分が母語だと見なしている言語, 他人によって母語だと見なされている言語)

語を習得できる。しかし、この3つの言語だけを信じて活用しないとそれは〈毒〉になる。だから、言語は常に使わないとさびてしまう〈道具〉であると語る。その話に韓国語も道具なのか、と聞いた。〈言語は道具だと言われているでしょう〉という答えが返ってきた。しかし、愛さんは気づいてないのかもしれないが、愛さんが、3つの言語を〈道具〉と〈毒〉に例えたのは、愛さんにとって1つの言語も欠かすことができないという意味ではないだろうか。言い換えれば、さびてしまわないように常に3つの言語を使い生きていこうと言えよう。インタビューをしている中で、筆者はそう感じていた。

コウさんと愛さんにとって日本語は外国語としてそれほど重要な言語ではない。ただ、役に立つ言語として認識されている。しかし、二人とは正反対に、3つの言語のどれもが〈わたしのことば〉で、日本語はもう外国語ではないと語る秋さんがいる。

4. 3. 秋さんの場合—「ことばが自分をつくる」

秋さんが日本語という言語に初めて触れたのは小学6年生の時だった。中学生だった親戚のお姉さんに50音図を覚えてもらったことがきっかけである。「す」と「き」を合わせると「すき〔好き〕」になり、「す」と「い」と「か」を合わせると「すいか〔西瓜〕」になる。秋さんにはあまりにも簡単すぎる言語が楽しかった。中学に入り、「日本語」しか選択できない外国語の授業を受けることになる。秋さんはすでに平仮名を覚えていたため、クラスでは誰よりも日本語が上手だった。高校3年までの6年間、日本語だけは全学200人の中でいつも100点満点を取るなど、日本語は秋さんにとって格別なものになっていく。そして秋さんは大学でも日本語を専攻することになる。しかしそれは、第1志望としていた経済学部には不合格となり、日本語を選択することにしたからである。でも、日本語は自分のいいところを見せられる、という思いもどこかにあった。秋さんは、大学2年生だった2004年、1年間の交換留学で来日することになる。この留学の経験を通し自分が持っている3つの言語について初めて「意識」することになる。

朝鮮語も中国語も話せると言うときみんなすごい—すごいと言ってくれるのでこれがこんなにすごいとは{アッハハハ}。その時に

ヨンサマ〔韓国の俳優〕のブームがすごくて—。韓国語を勉強している日本のアジュンマ〔おばさん〕たちに名刺をもらったり、地域でこういうのをやるからぜひ来てとか…。中国では考えたこともなかったことで…。一度もメリットだと感じたこともなかったことを外国で始めて経験して—。なんかいつも歓迎されている感じで—。

秋さんにとって「言語」とは、もうただの「手段」ではない。なぜなら、自分が話す言葉に「重み」を感じたからである。もちろん、悩みもあった。

生まれてすぐ話した言葉はたぶん、オンマ〔母〕、アパ〔父〕とか—。家族みんな家では朝鮮語を話して。で、段々大きくなって幼稚園とかに通ったときは、ニュースとか新聞とか街の広告とか全部中国語じゃないですか。だから、自然に身に着いたというか。混乱もなく、韓国語も中国語も自然に身についたと思います。でも、なんか…自分は韓国人とも違うし、中国…漢族とも違うし—、日本人とも違うな—という意識は常にあるんですね—。なんか、韓国に行ったときに、韓国語で話すのは抵抗感がありました。デパートとか行って韓国語でしゃべりたくないな—と。なんか、韓国語、独特のイントネーションがあって、初めはそれをすごく気にしたんですね。まあ、中国でも中国語は漢族のように完璧にはできないし。それは中国でも同じ感じで。日本でも同じ感じ。全部あるんですね。ちょっと乱している感じが常にある…。

すると秋さんは、テーブルの上に置いてあった紙に3つの大きな円を重ねて描き、その真ん中の円に中国語をそしてそれぞれの円に韓国語、日本語を書きながら説明を続けた。

ここ足りない部分はこの言語で、ここ足りない部分はこの言語で。

〈3つの言語が完璧ではないけど、お互いに補っている。以前は悩みがあったけど、今はこのような自分でいい。それでいいんだ〉と語るのである。秋さんにとってそのどれも〈完璧〉とは言えない。しかし、その言語は互いがバランスを保ち、秋さんにとって力になっている。そして、

日本語も下手。中国語も下手。朝鮮語も下

手。でも、この3つの言語で一つの言語がなくなったら自分らしさがなくなると思います。自分の人生で全てを捨てる形になると思います。朝鮮民族の中には多い。自分は何もできない。中国語もできないし、朝鮮語もできないし、日本語もできないし、英語もできないし、私は何者みたいなー。でも、そういう時期は必ず訪れると思います。私もそういう道を歩んできたし、そういう葛藤の中でそれでいいんだとー。

秋さんにとってそれぞれ異なった意味のはずだった言語が、次第に彼女の人生において統合的な意味のあるものになっていく。

日本語がなければどういう人生なのかな…自分の生き甲斐それ自体というか[笑]日本語がなければ自分を上手く表現できなかったかもしれない。日本語がなかったら自分自身を見つけられることができなかつたかもしれないです…。自分自身の姿が表れたのはやはり日本語があったからこそ自分を見出せるというか自分らしさというか、私はこういう自分でいいんだみたいなー。中国語はこんな自分を最大限にしてくれる言語。自分は誰なんだろうと思う時にいろいろ考えたり、家族や親族と話したりする時の朝鮮語。でも、そのどれも私のことばだと思います。言語って生きる時にプラスにならないといけない。言語って完璧なものではない。自分って完璧な自分がないようにー。

このように笑顔で語る秋さんにはそのどれも〈私のことば〉である。日本語を通して自分を上手く表現し、そのことばを通して今まで考えてなかった「自分」を発見したり、改めて感じたりしていて、そのような「自分」を中国語で最大限にしていくことに気づく。時々落ち込んだり悩んだりする時には「自分」という存在を朝鮮語で確かめている。秋さんの語りには「ことばが自分をつくる」という意味が示唆されている。それは「言語」を学び、その言語を通して、「自分」という存在を自分の人生とともに描いていくことであろう。

5. 言語の境界を「乗り越える」ことから「生きること」へ

まず、3人の語りから明らかになった「境界」とは、「母語」「母国語」「外国語」という枠ではない。なぜなら、3つの言語をどう捉えているかが異なっており、それぞれその「言語」に対する意味も異なっていたからだ。何より、自分にとって意味のある言語と言語の境界を「生きている」ということである。コウさんは朝鮮語と韓国語、自分のもう一つの言葉である〈ヨンビョンマル〉、そして日本語、英語といった言語を持っている。コウさんにはそのどれも自分にとって意味のある言語であり、その言語と言語の間を揺れ動きながら、「言語の境界」を生きているのである。愛さんの場合は、「自分はこれだ」と母語を通して示していて、自分のルーツを考えることは生きていく上で彼女の力になっている。自分にとって韓国語だけでも意味があると感じている。ただ、3つの言語を〈道具〉と〈毒〉と例えたことは、1つの言語も自分にとって欠かすことができないことであるが、それに気づいてないと言えよう。また、特定の言語を母語であるとし、それを話す自分を「自分らしい」ということによって、「外国語としての日本語」を受け入れられない状況なのかもしれない。もしかして、日本語も中国語も韓国語も自分にとって意味のあるものだと思いつつ、これは自分の「母語」ではないから、これは「外国語」だからというふうに分けて「境界」を作っているのかもしれない。しかし重要なのは、そのように揺れ動きながら生きていることである。

秋さんは、そのどれも下手だと感じていた自分の言語を、価値があると認めてくれた他者によって、自分の言語に対する意識が変わっていった。完璧な自分がないように、完璧な言語がないと考えるようになってからは、日本人とは日本語で話せるし、韓国人とは韓国語で話せるし、中国人とは中国語で話せるし、朝鮮族とは中国語と朝鮮語、もし、その朝鮮族が日本語を学んでいたら日本語でも話ができる。だから、3つの言語の中で1つがなくなったら「自分らしさ」がなくなると感じるのである。ここでの「自分らしさ」とは、つまり、さまざまな人々との関係で、自己の多様性、動態性に気づき、これが「自分らしさ」なんだ、というように感じたり、「自分らしさ」を更新したり、生

成したり、もしくは生成されたり、確かめながら生きていることであろう。つまり、「自分」を抜きにしては語られないことばを通して、人生とともに「自分らしさ」を描き続けていくことであった。

コウさんと愛さんと違って、秋さんは「外国語」であるはずの「日本語」をも「私のもの」であると語る。言語が「私のものになる」というのは、ことばをアイデンティティの観点から捉え直す重要性とも繋がると言えよう。多くの人には「アイデンティティ」という言葉を、「自己同一性」と訳したり、「本来の自分らしく生きること」であるとも解釈したりしている。その時に、その「本来の自分らしさ」というのを、アイデンティティの自己同一性と混同していると思われる。例えば愛さんが、アイデンティティという言葉に敏感になり、「朝鮮族としてのアイデンティティ」というふうに問われることが苦であると感じていることは、アイデンティティということ「単一」「一貫」「固定したもの」であると捉えているからであろう。さらに愛さんは、韓国語で話す自分を一番自分らしいと語るが、それもまた、従来の「自分らしさ」とは、変らないものと意識されていると言えよう。すなわち「自分は自分であり真の自分は不変である」という感覚でそれが「自分らしさ」であろう。

これは「母語」であり、それは「母国語」である。またこれが「外国語」というように別個にしてしまう人の認識をすべて「無」にすることはできない、という事実を否めない。そのため、そのような「境界」を「乗り越えていく」ことではなく、「生きること」として考える必要があるのではないか。「乗り越える」という意味には、漢族のような漢語を目指してきたコウさんのように、ある目標があって、そこに向かっていかなければならないように感じられる。漢語ができるのにもかわらず、漢族のような漢語にはなれない不安を抱えているコウさんも、自分の漢語は漢族の漢語という「境界」を乗り越えなければならないと考えていたのである。それは日本語学習者が感じることに同じであろう。多くの日本語学習者は「正しい日本語」を目指して、「日本人のような日本語」を身につけようと努力する。しかし、その「日本人のような日本語」を乗り越えられないことで苦しんだり、ストレスを感じたり、自分の中で「二分化された日本語」の問題（鄭，2010）も起きているのである。

従って筆者は、言語を「生きること」という文脈で考えることが重要であると捉えている。それによって、最初は「外国語」であった言語が「私のもの」になっていく。秋さんはそのどの言語も下手だが「私のもの」であると感じている。その感覚は、自分の中で自覚的、かつ複合的に育てられる言語、その言語を〈自分にプラスにしていく〉ことができるのである。

自分が持っている様々な言語という境界を揺れ動きながら、自分とは何かと考え、自分らしさを見つめたり、自分にとって生きる力を探したりしながら「言語の境界を生きる」ことの意味を彼らの語りは物語っているのである。

文献

- イ・ヨンスク(1996).『国語という思想』岩波書店.
王翰碩(1990). 북한의 친족용어(北韓の親族用語)『国語学』20, 168-202.
カン・ジェシッ(1992). 中国東北地方朝鮮族の民族意識に関する研究(朝鮮語)『慶熙大学校大学院 高鳳論集』11.
木下康人(2003).『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂.
金紅梅(2009). 中国朝鮮族学校における外国語教育の展開について『政策科学』16(2), 51-63.
権香淑(2001). 中国における「朝鮮族」の研究所説——方法論的アプローチの一考察『アジア研究』47(3), 81-105.
桜井厚(2002).『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
桜井厚, 小林多寿子(2005).『ライフストーリー・インタビュー——質的研究入門』せりか書房.
ザトラウスキー, P.(1993).『日本語談話の構造分析——勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版.
孫連花(2004).「トンム(동무)」に関する社会言語学的考察——中国朝鮮族の文学作品における言語生活を中心に『国際協力研究誌』10(2), 83-98.
田中克彦(1981).『ことばと国家』岩波書店.
鄭(Chung)京姫(2010).「二分化された日本語」の問題——学習者語る「日本語」の意味に注目して『リテラシーズ』7, 1-10.

- 中野卓, 桜井厚 (編) (1995). 『ライフヒストリーの社会学』 弘文堂.
- 韓 (Han) 景旭 (1995). 中国「内地朝鮮族」のエスニシティ——若者三世の事例を中心として『民族学研究』 60(3), 249-259.
- 福岡安則 (1993). 『在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ』 中公新書.
- 藤井幸之助 (1993). 中国朝鮮族の二重言語および民族意識に関する予備調査. 徐龍達先生還暦記念委員会 (編) 『アジア市民と韓朝鮮人』 (pp. 272-297) 日本評論社.
- フリック, U. (2002). 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 (訳) 『質的研究入門——〈人間の科学〉のための方法論』 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung*. Hamburg: Rowohlt.)
- やまだようこ (編) (2007). 『質的心理学の方法——語りをきく』 新曜社.
- Skutnabb-Kangas, T. (1981). *Bilingualism or not: The education of minorities*. Clevedon: Multilingual Matters.

付記 本稿は、国際研究集会「言語教育とアイデンティティ形成」(2011年3月6日:早稲田大学)での口頭発表およびその予稿集をもとに加筆・修正したものである。

(2011年4月30日受付)